

にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト vol.3

『冬の花火、春の枯葉』

原作:太宰治 / 構成・演出:倉迫康史(Ort-d.d)

3月24日(金) - 3月27日(月)

にしすがも創造舎特設劇場



©萩原靖


主催: NPO 法人アートネットワーク・ジャパン / Ort-d.d

特別協賛: **Asahi** アサヒビール株式会社

協賛: SHI/EIDO / **トヨタ**自動車株式会社 / **Panasonic**

助成: **Asahi**アサヒビール芸術文化財団

後援: 豊島区 豊島区文化創造都市宣言記念事業

 平成17年度文化庁国際芸術交流支援事業

お問合せ

東京国際芸術祭(TIF)

〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 旧朝日中学校

TEL.03-5961-5202/ FAX.03-5961-5207/ tif@anj.or.jp

今こそ太宰、本物の負け犬たちの物語

太宰初の本格戯曲『冬の花火』冒頭の台詞 - 「負けた、負けたと言うけれども、あたしは、そうじゃないと思うわ。ほろんだのよ。滅亡しちゃったのよ。日本の国の隅から隅まで占領されて、あたしたちは、ひとり残らず捕虜なのに」 - 太宰は、戦後新しいユートピアの建設が始まると希望をもっていた。だがすぐに希望は絶望へと変わった。絶望の理由は 敗北 を自覚しない国民。敗北の自覚なき 再生 はありえない。晩年、すなわち三十代後半の太宰は己の身と心を削って敗北を見つめ続けた。日本近代文学の演劇化に挑み続ける演出家によるニヒルでユーモラスな太宰治流敗北論。

作品紹介

『冬の花火』『春の枯葉』について

戯曲『冬の花火』は太宰治初の本格的な戯曲であると同時に、昭和 20 年 8 月 15 日の終戦から昭和 23 年 6 月 13 日の死までの太宰の作家活動後期の始まりとなる重要な作品である。

中期といわれる昭和 13 年から 20 年までの 7 年間、太宰はそれまでの無頼的な生活をやめ、つつましい家庭生活の中で職業作家として健康的に生きてきた。しかし戦後、その安定と平和をかなぐり捨て、太宰は再び、反逆精神に満ちた、破滅的な作家生活を送り始め、『ヴィヨンの妻』『斜陽』『人間失格』などの数々の傑作を生み出した。太宰をそのような修羅に駆り立てたものは何だったのか、その重要なヒントが『冬の花火』と続編『春の枯葉』にはある。太宰評論の第一人者である奥野健男はこう指摘している。

太宰治はもっとも真剣に日本の敗戦を受けとめた。それ故、もっともはげしく動揺した。太宰は敗戦によって、古き悪しき日本が、ケチくささ、いやらしさの根源が滅亡し、全く新しいものに生まれかわることを夢想した。真の人間革命による社会革命、ユートピアが実現することを願った。(中略)太宰治は真剣に敗戦による変革を夢想したが故に、戦前戦中と本質的にはどうも変わらない戦後の現実を、どうにもならない日本人とその未来を、悲しみの中に誰よりもはやく認識し得たと言えよう。故郷津軽を舞台に、その絶望の心情を描いたのが『冬の花火』『春の枯葉』である。

太宰の後期はこの絶望から始まった。その死を含めて、後期の三年間はこの絶望との闘いだったといえる。太宰の見抜いた戦後の真実がいかにか的を得たものだったかは、『冬の花火』の水谷八重子主演での新派による上演が GHQ によって禁止されたことでもわかる。また『冬の花火』雑誌掲載の際には冒頭の台詞、「日本の国の隅から隅まで占領されて、あたしたちは、ひとり残らず捕虜なのに」は同じく GHQ により削除された。

日本の戦後を考える上で太宰治の『冬の花火』『春の枯葉』は重要な戯曲である。

人が初めて太宰治に触れるのはいつのことだろう。
教科書に載っていた『走れメロス』か、
それとも新潮文庫の百冊の『人間失格』か。
そうして人は太宰を誤解する。
なんだか偽善的な作品を書くヤツだ、
あるいは、ずいぶん自虐的でナルシスティックなヤツだ、と。
私もそうだった。
そのせいで長い間、太宰作品を避けて通ってきた。

私が太宰作品と再会したのは、30を越えてからだった。
太宰のノンフィクションに見える作品が
実は計算されたフィクションであることや、
自虐の裏にあるユーモア精神や他者へのサービス精神、
読者へのホスピタリティといったものに気づけるほどに私も大人になっていた。

驚いた。と言うほかはない。太宰は「現代」であった。
過去の遺物のようになった「近代」ではなく、
現代に通じる感性や問題意識をみずみずしく抱えた「近代」がそこにあった。
その太宰が晩年、といっても30代後半、今の私と同世代である、
自分の生活と生命をギリギリまで削って問い続けたのが
「敗戦後の日本人のあり方」である。
太宰の問いに答えを出せないまま、戦後60年が過ぎた。

日本は敗戦国でありながら、戦勝国に同化することで、
敗北からの逃走をはかった。
一方、太宰が行ったのは敗北との闘争だ。
逃走か、闘争か。
今、私たちはあらためてその選択をすべき時にきている。

太宰の闘争開始宣言でもある『冬の花火』『春の枯葉』を軸に
太宰後期の作品のエッセンスを取り込みながら、
太宰が戦おうとしたものの正体とその闘争の軌跡を劇化する。
太宰にならってユーモアとサービスをふんだんに盛り込みながら。

倉迫康史 くらさこ こうじ プロフィール



Ort-d.d(オルト・ディー・ディー)プロジェクトリーダー・演出家。
1969年、宮崎県生れ。早稲田大学卒業後、演出活動を開始。2000年より現代舞台芸術ユニット Ort を始動。「ささやきの演劇」と呼ばれる様式で注目を集める。

03年より東京と宮崎の二拠点制への移行に合わせて Ort-d.d と改名。Shizuoka 春の芸術祭、利賀フェスティバルなど多くの国際演劇祭に招聘される気鋭の演出家。

ク・ナウカ、IKACHI 国際舞台芸術祭プロデュース作品など外部演出も多い。04年には、国の重要文化財である東京国立博物館表慶館にて『四谷怪談』を上演、05年3月の東京国際芸術祭では全国の地域劇場の劇作家、俳優たちが共同創作した『昏睡』の総合演出を務める。また、東京藝術大学非常勤講師、豊島区民を対象にした「読み聞かせ実践講座」(文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業)の講師を務めるなど、地域に開かれた演出家としての活躍も目覚しい。

05年10月、にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト vol.1 として M・エンデ作『サーカス物語』を体育館にて上演。レジデント・アーティストとして活動し、『サーカス物語』ではオーディション、ワークショップ、稽古そして公演まで一貫してにしすがも創造舎内で約3ヶ月にわたり行い、公演では約1000名を動員、地域の方々も多数来場した。

06年2月には宮崎市ステージ文化推進事業公演でオペラ『カルメン』の演出を担当。

06年4月より Ort-d.d 第三期と位置づけ、「日本近代文学の再発見」、「レパトリー化を目指した上演」、「豊島区の歴史文化施設からの発信」などを主眼として活動を展開する予定。

「創造(稽古場)から発信(劇場)へ」にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト

廃校校舎を転用して運営されているアートセンター「にしすがも創造舎」。ここで生み出された作品の上演を行なう「にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト」が05年2月に始動しました。より開かれた形をめざし、「創造(稽古場)から発信(劇場)へ」。にしすがも創造舎は、子どもも大人も、地域住民もアーティストも自由に集えるアートセンター+チルドレンズ・ミュージアムをめざし、走り続けています。【豊島区文化芸術創造支援事業】



にしすがも創造舎外観



にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト Vol.1 『サーカス物語』

公演概要

原作：太宰治

構成・演出：倉迫康史 (Ort-d.d)

出演：三橋麻子

岡田宗介

市川梢

寺内亜矢子 (ク・ナウカ)

山田宏平 (山の手事情社)

村上哲也

美術：伊藤雅子

照明：木藤歩 (balance, inc)

サウンドデザイン：棚川寛子

衣装・ヘアメイク：ROCCA WORKS

衣装制作：梶山知子 野村佳世

宣伝美術：山本ゆうか (ten ade) ROCCA WORKS

スチール：萩原靖

舞台監督：弘光哲也

制作：蓮池奈緒子 (NPO 法人アートネットワーク・ジャパン)

3月24日(金) 19:30

3月25日(土) 15:00/19:30

3月26日(日) 17:00

3月27日(月) 15:00/19:30

終演後、ポスト・パフォーマンス・トークあり

会場 にしすがも創造舎特設劇場

料金 一般 3000 円 / 学生 2000 円 (当日要学生証提示)

豊島区民割引 2500 円 (TIF のみ発売)

(全席自由・日時指定・税込)

前売開始 1月11日(水)

チケット取扱 チケットぴあ 0570-02-9999/9966 (Pコード 366-207)

e+ (イープラス) <http://eee.eplus.co.jp> (パソコン&携帯)

東京国際芸術祭(TIF) 03-5961-5202 <http://tif.anj.or.jp>

お問合せ 東京国際芸術祭 03-5961-5202 tif@anj.or.jp <http://tif.anj.or.jp>